

7 サッカー 総評

第61回大会は男子55校・女子13校が参加し、アースケア敷島サッカー・ラグビー場を主会場に、5月2日から熱戦が繰り広げられた。

5月とは思えない暑さと強い日差しの中で行われた男子の決勝戦は、5年ぶり18回目の優勝を狙う前橋育英と、前日に初の関東大会出場を決めた勢いをそのままに、初優勝を狙う健大高崎の試合となった。

前半は健大高崎がハイプレスと素早いカウンターで優位に進め、前橋育英はGKの好セーブで凌ぐ。後半序盤も健大高崎が攻勢を強めるが、中盤以降は前橋育英が盛り返して一進一退の攻防となり、無得点のまま延長戦へ突入。延長後半、健大高崎がロングボールのこぼれ球を拾ったFW長井が、カットインシュート。これがゴール左隅に決まる。このまま試合終了かと思われたが、ラストプレーで前橋育英が同点に追いつく。左サイド、ロングスローの混戦からOGで得点し、PK戦へ。11人全員が蹴ったPK戦の末、前橋育英高校が優勝した。

女子の決勝戦では左サイドを起点に幅広く攻撃を展開する前橋育英に対し、健大高崎が粘り強い守備で対応しながら、主導権を争う展開であった。そんな中、後半にこぼれ球を押し込んだ健大高崎が12年ぶり4度目の優勝を飾った。

女子は、部員不足や初心者減少により13校中4校が合同チームで参加するなど、競技人口が減少しつつある。一方で競技レベルは向上しており、シード校と互角に渡り合うチームが増え、実力差がなくなってきた。さらに、絶対的王者だった前橋育英高校が健大高崎高校に敗れるなど、上位勢の構図にも変化が起きており、全体の競争力は高まっている。

今後は、向上しつつある「競技力」と、課題である「競技人口の確保・部員不足」をいかに両立させていくかが、県女子サッカーの重要なテーマとなる。地元群馬開催の関東大会での健大高崎高校の健闘を期待する。

女子サッカーは13校が出場したものの、そのうち4校は合同チームとしての参加となり、実質10チームによるトーナメント戦となった。競技人口減少の影響は県内でも顕著となっており、各校とも部員確保に苦慮している現状がうかがえる。

一方で、競技レベルに目を向けると、今大会は県内女子サッカーの勢力図に変化を感じさせる内容となった。太田女子高校がシード校である市立太田高校と引き分け、PK戦に持ち込んだほか、これまで二桁得点差となることも多かった前橋育英高校対伊勢崎清明高校、健大高崎高校対高崎女子高校の対戦も、それぞれ5点差での決着となり、各校の差が徐々に縮まりつつあることがうかがえた。

さらに、これまで「1強」と言われてきた前橋育英高校が、今大会で健大高崎高校に敗れるなど、上位勢の構図にも変化が見られた。各校の強化や成長により、県内女子サッカー全体の競争力向上が感じられる大会となった。

その一方で、初心者から競技を始める選手の減少や部員不足は依然として大きな課題であり、今後の部活動運営や競技普及に向けた取り組みが求められる。競技力向上と競技人口確保の両立が、今後の県女子サッカー界にとって重要なテーマであると感じさせる大会であった。

